紙芝居特集号の発刊にあたって

本学は、保育に特化した単科の大学です。その歴史は109年という長きにわたりますが、その間、児童書や専門書など、様々な保育教材が使用されてきました。紙芝居も欠くことの出来ない保育教材として使用され、現在に至っています。しかし、かつて社会の隅々で紙芝居を演じられていた光景をあまり見ることができません。

戦後まもなく、紙芝居のおじさんが拍子木を打って子どもを集め、水飴などの駄菓子を売り、人数が集まれば、紙芝居を始めるという光景は、日本のほとんどの街角で見られました。しかし、日本社会が経済的に恵まれるにつれ、テレビが普及することで、あるいは、衛生観念の高まりとともに、駄菓子の非衛生性が批判されることとなり、街頭紙芝居は、次第に、私たちの日常生活からその姿を見せなくなりました。とはいえ、紙芝居自体が完全に日本社会からなくなったわけではありません。

保育園や幼稚園では、宗教教育や、情緒教育を高めるために紙芝居は使用されてきましたし、紙芝居を扱っている児童図書館などがあると聞いています。また、複数の母親が集まり、「手作り紙芝居」のサークルなどが形成され、現在でもその文化が私たちの社会で継承されています。

紙芝居には、他のメディアに比べて演じ手と観客との間にある特質した性格が見られるように思います。双方向性と呼ばれる演じ手と観客との関係です。テレビなどは一方的にその情報を観客に流し続けますが、紙芝居は演じ手と観客がともに相手の動きに反応しながら、その時々の動的空間を生み出します。この双方向性は、紙芝居から紡ぎ出される画像と人間の肉声の生き生きとした結びつきの中で現れます。この双方向性はある意味で、社会の原初形態を現しているともいえます。というのも、この双方向性の中に、演じ手と観客という異なった役割が存在しながら、同時に、そこには、人と人との融合関係が生み出されているからです。この紙芝居の力は幼児教育にとってやはり注目すべきことといえるでしょう。

本学は昨年と本年度、独立行政法人青少年教育振興機構の「子どもゆめ基金」から「子ども文化と紙芝居プロジェクト」というプログラムで、助成金をいただきました。その助成金をもとに、昨年は、「紙芝居の魅力と演じ方」という名古屋柳城短期大学フォーラムを開催し、紙芝居に関する大変に有意義な学びの会を持つことができました。また本年度は「手作り紙芝居」をテーマにフォーラムを開き、参加者が紙芝居の魅力や手作り紙芝居の楽しさを経験いたしました。これらの一連の経験をもとに今回、紙芝居特集として、紀要を発刊することになりました。この特集号を契機に、今後ますます幼児教育を深めていくことを願っています。

2007年12月

名古屋柳城短期大学学長　永見　　勇